

石仏の種類

1. 如来形



如来とは悟りをひらいた者で仏陀ともいいます。悟りをひらいた釈尊の像が釈迦如来像です。大乘仏教の成立以来多くの仏陀があらわれ、それにともない数々の如来像が作られるようになりました

釈迦如来



金屋 釈迦如来

釈迦如来像は釈尊の像ですがもっとも一般的なのは釈尊が説法する姿を表わしたもので印相は施無畏印・与願印、あるいは禅定印に結ぶ単独像です。ほかに薬王、薬上菩薩や文殊、普賢菩薩を脇侍に伴う三尊像も見られ、また釈迦の十大弟子を眷族（付き従うこと）として従える例もあります。



頭塔南面 釈迦如来三尊

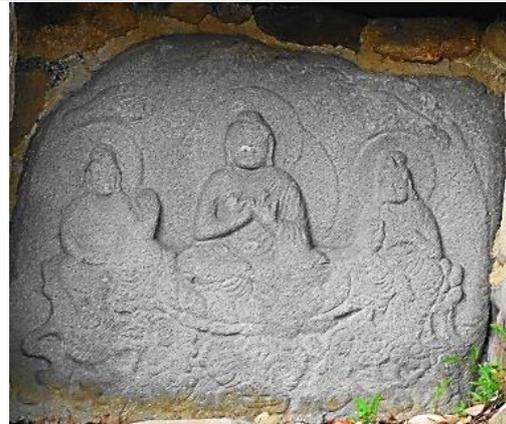
阿弥陀如来



阿弥陀如来も釈尊と同様に、もとインドの王子でしたが48の大願を立て、修行の末如来になったといわれます。

その大願の中に「念仏を行う者は必ず極楽浄土へ行ける」と説いていて「無量寿如来」とか「無量光如来」とも呼ばれています。結ぶ印相の種類は多く古くは施無畏印・与願印、あるいは説法印、平安時代以降は阿弥陀定印、浄土信仰が盛んになった平安後期以降には来迎印を結ぶ例が多いようです。各時代を通じて観音、勢至菩薩を脇侍を従える三尊像の例が多くあります。

新薬師寺 阿弥陀如来



頭塔西面 阿弥陀三尊

薬師如来

正しくは薬師瑠璃光如来といい、今も東方瑠璃光世界で説法しているといわれます。まだ菩薩だった時代に立てた12の大願の中に人々を病から救うことが挙げられ、日本でも古くから病氣平癒を願って多くの像が造られ、とくに眼病には靈験あらたかとされ多くの人の信仰を集めました。右手は施無畏印、膝に載せた左手に薬壺（やっこ）をもつのが基本の形ですが、奈良時代くらいまでは右手を施無畏印、左手は与願印で薬壺を持たない例もあります。三尊像の場合は脇侍は日光、月光菩薩像です。



地獄谷石窟仏 薬師如来



石位寺 伝薬師三尊

毘盧舍那仏

略して盧舎那仏（るしゃなぶつ）とも言われ蓮華蔵世界という広大な宇宙で今なお説法を行っています。

蓮華座に結跏趺坐し、持物はとりません。日本では奈良時代から篤く信仰され大宇宙の象徴にふさわしい東大寺の奈良大仏や唐招提寺金堂本尊が造られています。



地獄谷石窟仏 盧舎那仏

大日如来

密教において毘盧舍那仏をさらに発展させて密教世界の最高位に位置する絶対的な存在となりました。

如来でありながら頭に宝冠を載き、髪を結って胸や腕には装飾品をつけて結跏趺坐します。金剛界の大日如来像は智拳印、胎蔵界大日如来は法界定印を結び、瞑想にふける姿として造られています。

この印相で2種の大日如来像の区別がつき、また菩薩像と大日如来像の区別も見分けることができます。大日如来は単独で祀られる場合もありますが五仏一具で安置された例も多く、これを五智如来といいます。



山添村牛が峰 大日如来坐像摩崖仏



清滝摩崖石仏群 五智如来

弥勒如来

弥勒菩薩は釈尊の後継者として将来如来になることが決まっているため、如来の姿であらわされることがありますがこれが弥勒如来です。

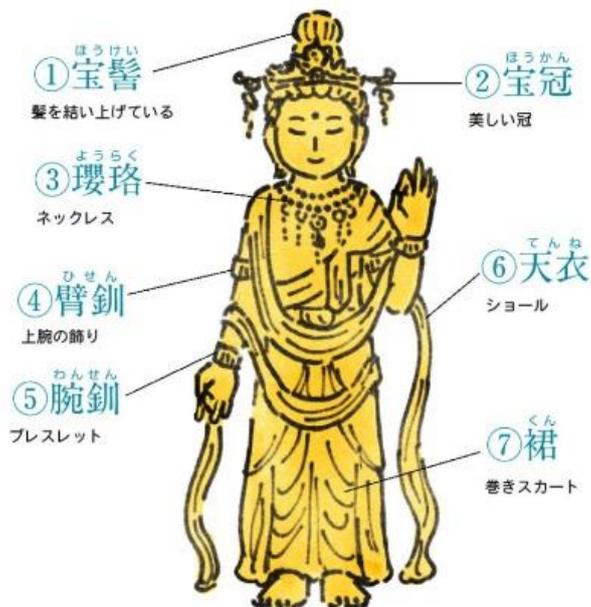
姿・形も釈迦如来と変わることなく印相も通例は施無畏印・与願印です。

代表的なものに奈良・当麻寺の弥勒仏坐像、「試みの大仏」といわれる東大寺の弥勒仏坐像、興福寺北円堂の運慶作の弥勒仏坐像があります。変わった像では法隆寺五重塔の塔本塑像のなかに椅子に坐る倚像の弥勒如来像があります。



長岳寺 弥勒石棺仏

2. 菩薩形



菩薩とは悟りを求めるために修業している人で他者をも救う行いを実践することですべての人々を救おうとしています。菩薩像の基本は出家する前の修行中の釈尊の姿ですが、如来形と同様多仏思想の発生により多くの菩薩が生まれました。如来の意志に従って様々な姿に変わります。女性の姿、顔や手が沢山あったり等と多様な外観を持つのが特長です。

聖観音

聖観音菩薩は観世音、観自在、光世音ともいわれ「世の音を観る」と書き、一切の人々の声や願い事を良く見抜かれるという意味です。仏像の中で各時代を通じて最も作例が多いのがこの聖観音像です。6世紀に朝鮮を経て仏教が日本に伝えられると飛鳥時代の百済観音像や救世観音像が造られ、密教が盛んになる8世紀には聖観音とともに千手観音、十一面観音、馬頭観音、如意輪観音、不空罽索観音、准胝観音なども盛んに造られました。

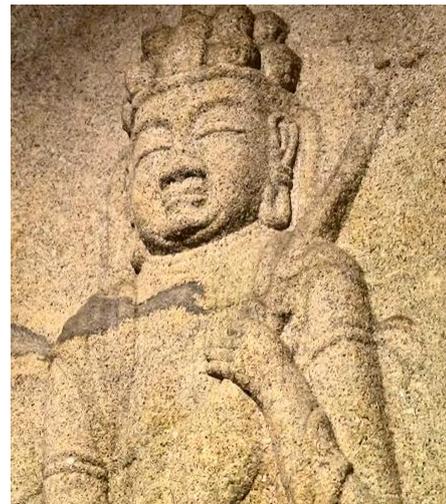


天理市龍福寺跡 聖観音像

十一面観音

苦しんでいる人をすぐに見つけるために頭の上に11の顔があり、全方向を見守っています。またそれぞれの顔は人々をなだめたり怒ったり、励ましてくれたりするといわれています。

頭上面のうち前3面を菩薩面、左3面を忿怒面、右3面を狗牙上出面（くげじょうしゅつめん）、うしろ1面を大笑面といい、頂上に仏面を配して11面です。中には本面とあわせて11面となる場合もあります。また11面の配列が異なる場合もあります。大笑面は、悪行を大笑いして改心させ、善の道に向かわせるといわれています。



王龍寺 十一面観音立像

如意輪観音

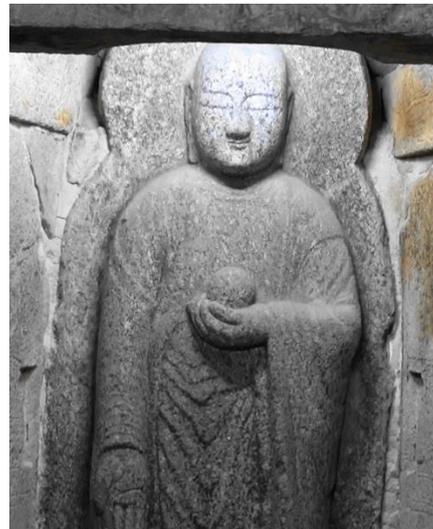
如意輪観音像は、観音菩薩の化身の一つであり、六観音の一尊に数えられる。また「救世菩薩」とも呼ばれる。原則として全て坐像または半跏像で、立像はまず見かけない。右膝を立てて左脚を跏趺坐にする「輪王座」にて座する。六臂の像が多いが、これとは全く像容の異なる二臂の像もある。六臂像は6本の手のうち、右第1手は頬に当てて考えるポーズを取る「思惟」の相を示し、右第2手は胸前で如意宝珠、右第3手は外方に垂らして数珠を持つ。一方、左第1手は体側に下げ、左第2手は未開敷蓮華（ハスのつぼみ）、左第3手は指先で法輪を支える。



桃尾の滝 六臂如意輪観

地藏菩薩

地藏菩薩は、釈迦が亡くなってから後、弥勒菩薩が悟りを開いて人間を救いにやって来る56億7千万年後まで間、人々を救う役目を持つ仏です。菩薩の一体に数えられますが、素朴な姿が特徴です。頭は丸い坊主頭で、宝冠や首飾りなどの豪華な装飾品はほとんどなく、代わりに錫杖と宝珠を持っています。地藏菩薩は、路傍に立って子供を守る仏として身近な仏像ですが、実は弥勒菩薩がやって来るまでの長い間、人間の世界を守り続ける役割を持つ仏です。



十輪院 地藏菩薩立像

3. 明王形

明王は、如来の教えに従わないものを救済するために現れた仏です。不動明王は、大日如来の命を受けて行動し、仏法を守らないものを調伏するためすさまじい忿怒相で表現され、光背は炎の形を模しています。右手に煩惱を断ち切る「宝剣」を左手に「羂索」を持っており、特に羂索には煩惱を縛り衆生を救うという意味があります。脇侍仏として矜羯羅童子（こんがらどうじ）と制吒迦童子（せいたかどうじ）を従えていることが多いです。



長岳寺奥院 不動明王



桃尾の滝 不動三尊摩崖仏



室生寺 軍荼利明王

4. 天部形

天というのは仏教以前からインドにあったバラモン教や民間信仰の神々のことですが、仏教はこれらを守り神として取り入れたもので姿もバラエティーに富んでいます。

金剛力士像



十輪院 阿形金剛力士



十輪院 吽形金剛力士



飯降薬師摩崖仏 天部頭



春日山石窟 多聞天